

《当評論：解りにくい問題に對する他論考文での補足》

『演劇的文化論』	『此處が解りにくい福田恆存①』から
P 409 : 「ロジック、つまり自己國籍を殺した普遍的なものに日本人の聲を籠める事こそ、實は西洋化、近代化の最終目標なのだ。その意味では、西洋流の大よその學者のやつてゐる事は誤魔化し仕事」	「自分を殺して役になり切るまでは名女優である。が、その殺した自分が役の上に再び伸び上がりつてきて初めて大女優といへる。」（「せりふと動き：p 276」）
P 409 : 「聲を捨てる事の出來ない演劇」 P 410 : 「西洋的、近代的思考を經た内容のせりふともなれば、日本人の肉體と肉聲には當然無理な姿勢を取らされる」・・・とは、個人の強靭性缺如（個人主義の未確立）と場の轉換困難（沈湎）の相關關係を述べてゐるのである。＊即ち、「テキサス小駅」のエピソード（母娘の「場轉換」の見事さ）や、「ハムレット」の「場に應じて複雜な自己の異なる面を、展開してみせる、それ故にこそ、その根柢に一貫した性格、人格」を必要とする、そのやうな個人の強靭性を必要とする、「近代人」役演戲の日本人役者における不可能性を恒存は述べてゐる。（「役者の日本人の『意=沈湎』が『姿』を裏切る」と。：参照『醒めて踊れ』P397・P399）	P 11 参照 「言葉（F）と話し手との間に距離（E）を保ち、その距離を絶え間なく変化させねばならぬのと同様に、相手と共に造り上げた場と自分との間（D1）にも距離を保たねばならず、その距離を絶えず変化させ得る能力がなければいけない。さういふ能力こそ、精神の政治学としての近代化といふものなのである」（『醒めて踊れ』）。 その「変化させ得る能力」とは、「西洋的、近代的思考を經た内容」即ち個人主義の歴史を經た「強靭性」が齎す能力なのであり、それが英國人「リチャードバートン」には具はり、日本人役者には望むべくもない、といふ事なのである。ただ一人「芥川比呂志」にして可能となつた、と。
P 411 「日本の西洋化、或は西洋の日本化が、單に日本の近代化、西歐近代の日本化でしかなかつた事で、その誤魔化しの弱點が演劇において最も著しく現れ、今日に至るまでその混迷を一身に背負はされてゐる」	P 13 参照 「実人生に近い芸術形式が芝居。日本は近代化がうまくいつてゐるやうに見えるが、實際はうまくいつてないのが芝居で解る（精神の近代化缺如の爲）」。即ち舞台に出る「非フレイジング演戲」＝実人生・現実の「非 So called 生活」。上記で言ふ「言葉の距離測定欠如」＝「個人主義缺如」を物語つてゐるのである。
P 412 「日本の西洋化・・西洋近代以前を等閑視・・」「結果として現れる檻櫻」⇒参考「テキスト」 P 9	P 9 参照：歴史の意識（西欧）・・・「絶対者のないところに歴史はありえない」⇒参考「テキスト」 P 6～8
「テキスト P 9・P 8」と「テキスト P 11」の相關關係。↓へ	「テキスト P 9・P 8」と「テキスト P 11」の相關關係。↓へ

<p>P 4 1 3 「近代化によって受ける傷の深さが演劇における程、強く自覺される分野は他にあるまい」・・・近代化とは、「テキスト P 8」の如く個別化、即ち全體離脱化（「健康・秩序・有機性・全一性」離脱化）であるが故。 * 実人生・現実の「非 So called 生活」「言葉の距離測定欠如」=舞台上の「非フレイジング演戯」に表面化。と言ふ事。 * 「演劇は凡ゆる點において、本來的に近代化そのものに抵抗を有し・・・」とは・・・近代化とは、「テキスト P 8」の如く個別化、即ち全體離脱化（「健康・秩序・有機性・全一性」離脱化）の志向を持つてゐるが爲と言ふこと。演劇はそれを所有。⇒「テキスト P 1 1 圖」</p>	<p>P 1 3 「日本の近代化の難しさ（即ち言葉の自己所有化=場との適応正常の難しさ）が芝居の世界で解る」「芝居の中の適応異常=実人生における適応異常の証拠立て」と恒存は言ふ。それは場との関係を「形ある『物』として見せる」即ち「距離測定」の行為が芝居で出来てゐないならば、実人生でもそれは出来てゐない、と言ふ事なのである。（別図《言葉の自己所有化》参照）</p> <p>「あらゆる分野の中で芸術が一番近代化が遅れてゐる。演劇でそれが実現出来れば日本の文化は安心。日本は精神の近代化が出来た事になる。」と福田恒存は述べてゐる。</p>
<p>P 4 1 6 下 「強固な傳統の無視・・政治的有用性（物質・肉體A）・・・」 P 4 1 7 : 文學（小説）に比べて、新劇の甚だしく近代化が遅れた理由。・・・戦後、文學座の「至上であつた藝術（B）は政治に對してよりも先に企業（物質・肉體A）に對して膝を屈してしまつた」。傍線は左翼劇團も然りだと。企業=（収入・人氣A）</p>	<p>拙論「個人の危機 P 2 下」。 「精神（B）は肉體（A）の保證なくしてその眞實性を自己確認しえぬ・・・」以下文参照。 「政治的有用性」=「社會の有用性」（物質・肉體A）</p>
<p>P 4 1 9 「日本の近代化と言ふ課程の中で一番貧乏くじを引かされてゐる辛さ」とは「テキスト P 9 圖」の露呈化。P 4 2 0 「日本近代化の象徴」としての演劇。：誤魔化しが効かぬ性質であるが故に、「近代そのものの弱點（全體喪失）に對しては本質的な賦活力」も又演劇にはその性質上内在してゐる。演劇の中にある「健康・秩序・有機性・全一性」がそれなのである、と恒存は希望的觀測を掲げる。「日本近代化論の爲の覺書」として。</p>	<p>3. 上記「恒存が言はんとしてゐる事。（纏め）」・・・「近代國家の未成立」と「近代適應異常」、かてて加へてその事に對して自己欺瞞と隠蔽がなされてゐるが爲に、政治・經濟・社會・藝術・文學等々、各分野に露呈してゐる日本の非近代の歪みが日本人には見えない。分かりやすくその歪みを見える様に圖化すると、「テキスト P 9 圖と P 8 圖」の差となる。・・・以下文。</p>